

飛鳥 ASUKA KAWARABAN
かわら版

2024年
10月

秋空号

第215号

発行所 株式会社 飛鳥 出版室
発行人 永野 正将
ADD: 〒780-0945 高知市本宮町65-6
TEL: 088-850-0588
MAIL: info@asuka-net.jp



秋の味覚でお勉強中

表紙写真撮影：株式会社 飛鳥

もくじ

新聞余話⑤	大澤重人	02
おのころじま奮染記 33	田島征彦	03
日本からの眺め⑤	氏原名美	04
初めての本「よくばり雑記帖」ができるまで		
	西山壽万子	05

食べるの大好き。僕の入院食レポ？		
飛鳥のビアガーデン		06
広告		07
さもないこと⑥	永野雅子	08

「たかが」と「されど」



「書きたいものがあれば、遠慮せずドンドン書いて」

2008年春に支局長として高知に赴任した際、若い支局長

にそうけしかけました。毎日新聞の県内部数は当時、おおよそ3000部。県内購読者の9割の部数を誇る高知新聞と比べたら微々たるものです。部数の少なさを逆手に取り、各記者の「我」を存分に出したらいいと考えたのです。

3000部と言えば、輪転機で印刷するのにわずか3分ほど。県内34市町村役場や公立図書館、警察、消防などの公共機関、学校、有力企業などを除けば、一般読者はその半分ぐらいかもしれません。悲しいかな、県版で何を書いてもほとんど反響がありません。そのせいか、所属長が号令をかけ

ても、なかなか個性のある原稿は出てきませんでした。私自身、「支局長からの手紙」というコラムを毎週書いていて、「高知やったらなあ」と何度ほぞをかんだことか。

高知駅前には石川啄木の父子の歌碑がありますが、拙コラムがきっかけで建立されました。ただ、最初は反応がないので、そのコピーを歌人関係者に勝手にファクスをしたことで、歌碑建立の動きに火が付きました。経緯はこの欄で以前書きました。

それでも、紙面として発行し（書き）続けると、心を動かしてくださる人もいました。高知市出身で東京都在住のフリー編集者、堀内恭さんもその一人。帰郷した際に各紙を購入し、拙コラムをたまたま読み、はがき一面に細かい文字で書かれた感想をいただきました。

引退した会社の大先輩3人から長文などの手紙や連絡をいただいたのも、拙コラムがきっかけです。たかが3000部、されど3000部。今では、ネット配信もされるので、全世界からアクセス可能とも言えます。

今夏、驚きのニュースに遭遇し

ました。毎日新聞が富山県内で新聞の配送を9月末で休止するというのです。全国紙の看板を事実上取り下げるにも等しい決断です。部数は690部。取材体制は残すものの、紙の新聞が読みたい人には郵送対応すること。翌日以降の配達になります。その後、産経新聞も富山県内での発行を同時に休止すると報道されました。平均部数は272部。輸送代を考慮すると、背に腹は代えられないでしょう。

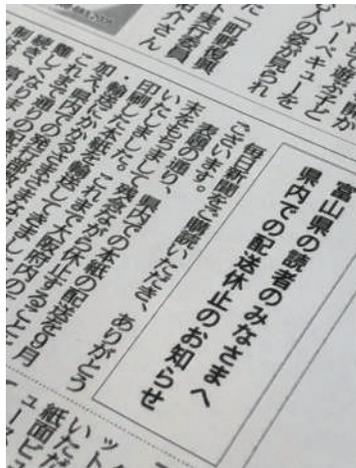
古巣の県内の部数は現在、954部です。県内のニュースを載せるはずの県版は、すでに四国4県相乗りの共通紙面に取って代わられています。この原稿を書いている最中にも、日経新聞が北九州・山口下関地区などの夕刊を9月末で休止するとニュースがネットで流れました。ポロポロと歯が欠けるかのようです。県内では圧倒的な高知も部数を年々減らし、今では13万8000部あまり。県内世帯数は

31万3000あまりと推計され、実は一番多いのは無購読世帯なのです。

新聞業界の低迷ぶりについて、高知市元職員で知人の西山壽万子さんに嘆くと、こんな返信がありました。

「さみしいねえ、やっぱり新聞は情報のコメだもんね」

連載の題名を「新聞悲話」に改める日が来ませんように。部数は減っても「されど」の意気込みを持つ記者はいるはずですよ。



富山県内での配送休止を伝える毎日新聞の社告（2024年7月）



大澤 重人

おおざわ しげと

渡来入歴史館（大津市）
専門員・元毎日新聞高知支局長

ぼくのころじま 大奮染記

ふんせんき

33.「憤染記」-1-

田島征彦

一年か二年に一冊売れることはあります。もちろん、そのためにうちにも出版社にも「憤染記」はたくさん残ったままです。では、どうしてこの本が出版されたのかをお話します。

その当時、ぼくは京都市の西北方向の口丹波に住んでいました。山に囲まれた自然の中で、畑を耕しながら、型染を制作する日々を送っていました。

ぼくの出版している本の中で一番重たい本は「憤染記」です。202ページもあります。定価、3,800円。1995年に出版されました。

95年までのぼくが制作した作品が入っています。それと一緒に、ぼくが生まれてから55年間のぼくの歩みを恥ずかしくなるほど正直に作品と一緒に書き綴った自伝でもあります。

ぼくは自分の個展会場や講演の場所へ自分の絵本やエッセイ集を並べて、サイン販売をするのですが、ほとんどの場合、「憤染記」は一冊も売れません。

堰川の土手の檜の大木のまわりに吊るして写真を撮ってみました。人の手が入っていない自然を背景にして、作品は生き生きとして嬉しそうです。

「そうだ！ぼくの全作品を口丹波の自然のあちこちに展示して、専門の写真家に撮ってもらって、

初めての画集を出版しよう。」

今でもそれほど人気作家でもないのに、当時は、ほとんど無名の貧乏絵描きです。ぼくの気持ちは舞い上がっています。正気ではありません。大きな作品をたくさん創るから、染料などをよく注文する田中直染料店が「染織と生活社」



という出版社を作っています。

頭へ血が上ってしまったぼくは、社長に電話をかけると、山陰線に乗って京都へ出かけました。田中直一社長はにこにこして会ってくれました。ぼくの話の聞くと「それはすばらしい。いい本にしましょう。」

京都に着いた時からぼくは少し落ち着き始めていたので、照れくさくなって、早々に引き上げました。

「会社も、少しづつ力をつけてきましたのでがんばらせてもらいます。」

にこやかな社長をあとにすくぼくは口丹波へ引き返しました。それから、やはり何年かは社長からの連絡はありませんでした。

(つづく)



田島 征彦
たじま・ゆきひこ
染色家・絵本作家

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年「じごくのそうべえ」で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年「ふしぎなともだち」で第二十回日本絵本大賞。沖繩の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖繩戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本「なきむしせいとく」が二〇一三年度の講談社絵本賞を受賞した他、国際的な評価を受けました。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

氏原 名美

いつもお日さまがあるように

（コースチャとマーシヤの願い）

長押しを立ててある私の祖父母の写真を見上げて、保育園に通う孫が「バアちゃん、死んだの？」と言う。「うん、ずっと前にね」と答える。「どうして死んだの？」と聞く。「歳をとったから」と説明する。「歳とって、死んで、お墓に入ってるの？」にそうだと答えたら、孫は急に思いついたように、「バアちゃん、死んだらバアちゃんのお墓作ってあげるね！」と言ったから、「バアちゃん、いつ死ぬの？」と聞いた。

ソ連時代の詩人で児童文学者のコルネイ・チュコフスキーの著作『二歳から五歳まで』には、就学前の子どもたちが発した創造性と機知に富んだことばがいくつも収録されている。子ども発想になるほどと感心したり読んだ後しばらく笑いが止まらなかつたりす

る。初版は一九二八年だが七〇年まで何度も版を重ねている。樹下節による翻訳で読んだ人がいるかもしれない。

一九三三年の第三版に四歳の男の子コースチャが「いつも」の意味を教わって発した詩がある。愛するもの全ては不滅だということ子どもたちの信念が表現されていると著者は言う。

いつもお日さまがありますように！
いつもお空がありますように！
いつもママがいますように！
いつもボクがいますように！

一九六二年、このコースチャの詩をリフレインにした歌『プースチ・フシグダー・ブーヂェット・ソソツェ（いつも太陽があるように）』が発表された。歌詞は「丸いお日様、周りはお空。男の子が絵を描いて、こんなことばを添えた」と始まり、二番は「みんな平和を求めている」と歌い、三番では爆音の恐怖を兵士に訴え、最後は「戦禍に抗い子どもたちのために立ちあがるう」と大人たちが非戦を誓う。

スターリンやブレジネフの検閲の時代なら発禁処分ものの歌詞だが、時はフルシチョフの「雪解け」時代、歌は国境を越えてヒットし、ソ連各地の児童合唱団の一番のレパートリーとなった。ヨーロッパではポップス調

の違う歌詞がつけられたようだが、アメリカではピート・シィガーが反戦歌として歌った。

私もこの歌を人様の前で一回だけ歌ったことがある。学生時代、夏休みにイギリスの学生グループや西ドイツやスイスから来た社会人たちと一緒に二週間、レニングラード近郊の保養所に寝泊まりしながらロシア語研修に参加した。普段は中高生に「ロシア語を教えている先生たちがロシア語の朗読や歌や劇の指導をしてくれた。生徒全員が学習成果を披露する研修最終日、村の公会堂に集まった保養客や近隣のお年寄りたちを前に歌ったのがこの歌だった。

ソ連崩壊後に訪れたロシアでも、その後長く暮らしたキルギスでも、誰かが「プースチ・フシグダー・ブーヂェット・ソソツェ」と歌い出せば、どこでもすぐに歌の輪が広がったものだ。

一昨年四月、独立系メディアの報道により国際的な注目を集めた「事件」があった。マーシヤという当時十二歳で父親と二人暮らしの少女が「軍を支持する絵を描く」授業で課題に反する絵を描いた。画用紙の右側に「戦争反対」

と書かれたロシア国旗、よく見ると、「戦争反対」の文字の上に小さく「プーチン」とある。左側に「ウクライナに栄光あれ」と記されたウクライナ国旗、少女と並んで中央に立つ女性が飛んでくるミサイルに向かって「ノー」のジェスチャー。絵を見た教師が校長に報告し、校長は当局に通報した。父親が逮捕され、マーシヤは児童施設に送られたという。今年の二月、マーシヤは疎遠だった実母に引き取られたとドイツ国営国際放送のロシア語版にあったが、以後、続報はない。

ロシア語の先生が誇らしげに「戦禍に抗い子どもたちのために立ちあがるう」と歌詞を朗読して聞かせてくれた五十年前を思い出す。マーシヤの学校の教師たちは子どもの時から繰り返して歌ったはずのあの歌を忘れてしまったのだろうか。

氏原 名美

うじはら・なみ

ピシケク国立大学東洋国際関係学部特任教授。越知町出身。北海道大学卒。



ピシケク市街からアラトー山脈を望む(写真:Saijo Y.)

初めての本

「よくばり雑記帖」ができるまで

西山 壽万子

思春期に地元新聞への投稿を始めた。

それから長い時間がたち、何年分の新聞紙面に散らばった投稿文を一冊の本にまとめるのも「終活」の一つではないかと考えだした。ひとは、自分の生きたコンセキを、この世にひとつづつ残したいものらしい。

65歳の定年を機に本づくり作業に取り掛かった。まず最初に使用することは、パソコンに接続して使用する「スキャナー」を手に入れることだった。

というのは、作りたい本の自身の多くは過去に新聞に載った投稿記事だったこともあり、取ってある古い新聞紙面の中にある、数センチ角のコラムを読み取ってワード文書化する必要があるからだった。スキャナーを買い、パソコンに取り付けるところから始めた。

言い落していたが、私は自分の本のすべてのページを、自身のパソコンで作るつもりでいた。その方が格段安上がりにも本ができるし、ひいては、読者にも安い値で

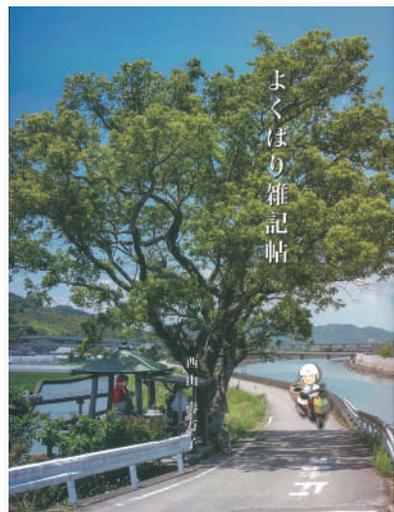
本を提供できる。すでにこの方法で母の追悼集など2冊の冊子を作成済みだったこともあり、方法に迷いはなかった。

ところが、である。以前の方法は、パソコンに、自身でじかに文章を打ち込むだけでよかったのだが、今回の本づくりでは、スキャナーを使って、新聞紙面の我が文が掲載されている数センチ角のコラム部分をワードなどのデジタル文書化してパソコンに置きなおさねばならない。

この作業自体は、単純な工程だったが、固くなった頭と体は速やかに稼働せず、行きつ戻りつした挙句、やがて作業は頓挫した。イライラするばかり、楽しくない作業だったからである。イヤなことには蓋をして時が流れ、あつという間に数年たった。どこかにこの作業をきちんと教えてくれるところはないかと思っていた矢先、「入力のお手伝いなら、しますよ」という奇特な女性が現れた。何という果報者だろう、私は。この申し出に飛びついたのは言うまでもない。かくして本づくり作業が始まっ

た。まず、何年もにわたる新聞掲載文から、これは本に入れたいと思う作を選び、コピーを取って、USBスティックと共に彼女に回す。新聞掲載文がワード文書となってスティックに入って私の元に戻ってくる。それを自身のパソコンに入れて貯めておく。空になったUSBスティックと次の投稿文のコピーをまた彼女に回す。彼女とて、普通に仕事をしている人だから、夜なべや週末にできる範囲の量しか頼めないもので、進捗には限りがあるが、着実に進んでいた。このようにして半年ばかりたったある日、恐ろしいことが起きた。

その日の午前中まで機嫌よく稼働していたパソコンが午後から不調になり、呼びかけに応えなくなつた。真っ青になってパソコン屋に飛んで行ったが、貯めたデータはどこにもなかった。パソコンは、ご臨終遊ばしたのだという。全くそんなことを想定してなかったで、バックアップたるものも取ってなかつたの



よくばり雑記帖

「よくばり雑記帖」 著者：西山 壽万子
B5変形版 320頁 定価：1,500円(税込)
※本のお問い合わせは飛鳥まで

だ。万事休す。おそろおそろ彼女に打ち明けると、「また、一からやればいいじゃないですか」と、私の不手際を責めようとしな。この時は、本当にこの人には天使の羽が生えているのではないかと思つた。

私はというと、シヨックのあまり、本づくりの意欲さえ失いかけていた。唯一、私をその境地から思いとどまらせるものがあるとしたら、「もしここで止めたら、これまで協力してくれた彼女の労苦は一体なんだったんだろう」という一点だけだった。その思いだけで、なんとか止めるのを踏みとどまった。

その後、「よくばり雑記帖」がどのようにして形を得たか、続きは本でお読みください。

食べるの大好き。 僕の入院食レポ？

飛鳥 印刷部 益井

数年前に、と言ってもほんの2、3年前の話なんです。急に白血病と診断されました。

いや、その時は本当に驚きました。まあ、診断される前から体がだるかったのは確かだったので、その時ちょうど正月だったもので、「三が日」が終わってから病院に行こうかな。」なんて思っていたんです。

ですが、妻はおかしいと思っただけでしょうね。すぐに病院行くよって引つ張り出され、車で連れて行ってくれました。僕はただの風邪だろうな一なんてのんきに思っていたんですが、ところがどっこい即入院する事になったわけです。本当に自分だけだと病気がてなかなか気付けないものですね。

そこから一年ほど病院で世話になることになりました。病院食ってすごいですね。何に感動したって、病院の魚料理って何を食べても小骨一

つ出てこないんです。骨取り技術がすごい。

あれって一体どうやって調理しているんでしょうね。とても気になります。

僕はあまり好き嫌いするほうではないこともあって、出てくる料理もおいしく食べられて満足していました。……そう、最初のうちはですが。



入院して9ヶ月経つと料理の味付けが、和風だろうが中華だろうが同じ合わせ調味料にほんの少しだけ違いを持たせているという事が分かってきました。どの料理も同じ味がするんです。

治療のために調子を崩していた事もあって、なかなか体が病院食を受け付けなくなっていたんです。でも、とにかく食べなくてはいけない。そんな時、病院にはコンビニなるものが存在するんですね。

もうね、肉まん最高！からあげ最高！火が通ってないものは食べられませんでした。ジャンキーな味がたまりません。

何よりも助けられたのが、カップスープです。朝ごはん時に1つあるだけでだいぶご飯が食べやすくなるアイテムでして、入院当初、朝にラウンジにある給湯器にそこそこ人が集まっておられて不思議に思っていたわけですが、無事僕もカップ片手に仲間入りを果たすこととなりました。

おかげさまで今では無事退院して好きなものが食べられるわけですが、食事制限があるうちは食べられないものがあるとそれが羨ましくなってしまうものでして。

なんと申しましょうか、好きなものが食べられるという事は、素晴らしいことですね。

皆様も健康にお気をつけてお過ごしください。

お目汚し失礼しました。



飛鳥のビアガーデン

飛鳥 制作部 林



7月に開催された恒例の飛鳥ビアガーデン。名前はビアガーデンとなっていますが、昨今の異常な猛暑、仕事終わりの19時スタートでしたが、とても屋外でなんてする気になりません。ビールなんか一瞬で沸騰してしまいます…。

ということで昨年に引き続き今年も屋内で開催。

仕事終わりのビールが最高！と言いたいところですが、飛鳥の7割の社員、呑みません、呑みません…。そんな時代です。

若者離れ代表の車、タバコ、そしてお酒。見事ランクイン！

しかし飛鳥のビアガーデンは何の話題もありません。アルコールが入っていないが入ってなからうがみんなワイワイ楽しそうに語り合っています。

終わりの時間に
なり最後にみんな
笑顔で「お疲れ様
でしたー」と挨拶
をし、さあさあ
2次会へ…

当然ありません。
そんな時代です。



私たち、株式会社飛鳥は SDGs（持続可能な開発目標）に 取り組んでいます。

実質再生可能なエネルギー100%の電力を確保し、
環境への配慮を実施しています。



ホームページの **作成** **編集** **管理** が
誰でも 驚くほど簡単に!

新時代のCMSが誕生しました!

A-TOOL

エイツール

「A-TOOL」はみなさまの声から誕生した、オンラインのホームページ作成サービスです。インターネットにつながる環境ならば、いつでもどこでもホームページの画面上で作成や編集を行うことができ、HTMLやCSSといったホームページを作成するための知識も必要ありません。



「A-TOOL」はお客さまの声から誕生しました!

「ホームページを作成したことがない」「HTMLなどの知識なんてまったくない」そんな方でも簡単に楽しみながらホームページの作成ができる「えい(良い)ツール」です。

YouTube
動画でCheck!



※動画は
WEBサイト
でもご覧に
なれます。

えい(良い)ツールあるよ!



イラスト制作：田村

業者に依頼すると高い!!

自分たちでホームページを作り込みたい!!

サイトにスピード感が必要!!

自社で簡単に更新したい!!

更新作業を特定の社員に頼りっぱなし

自社で簡単にネットショップを運用したい!!

今すぐ商品を公開したい!!

「A-TOOL」の利用者が「ぞくぞく」と増えています!



<https://a-tool.jp>

全て「A-TOOL」が解決します!! 詳しくは飛鳥まで!

TEL : 088-850-0588 MAIL : info@asuka-net.jp

七、もない、こと 6

今年の夏

永野 雅子

今年の夏は身にこたえる暑さだった。日中はもちろん、夜も冷房はつけっぱなし。電気代などと言ってられない日々。

日本は四季の国から二季になるという。よく行く産直市場で農家のおじさんが「今年は野菜も果物もこの暑さで育たん。今にみんなあ、北海道へ移住せないかんぜよ」と話していた。そこへ米不足のニュース。今まで生産調整などと言っていた米がスーパーの棚に無いと聞いて、孫たちの将来はどうなるのだらうと本気で心配になってくる。

とにかく元気でこの夏を乗り越えなければと、食事のメニューもレシピ本を見ながら

工夫した。

幸いなことに普段から食いしん坊の私は好き嫌いもないし、料理も松崎先生から「食べることは生きること。私が98歳まで元気なのは食を大事にするからよ」と教えていただいたおかげもあり、こまめに作る事が苦にならない。

ところがスイカだけはあまり好きではなくて、買ってくることはまずなかった。

そんなスイカを今年は本当によく食べた。産直市場で大きなものを丸ごと買って帰り、カットしたものを冷蔵庫に入れておき、一仕事終えて口に入れた時の幸福感。大袈裟でなく「美味しい〜」。

ある朝、起きてくると台所



「れん」などと言う。

時はちようどお盆の入り。「亡くなったご先祖たちの魂が年に一度帰ってくるお盆には殺生はせられん」と昔、おばあちゃんから言われたことを思い出し、手が止まる。ならばどうしよう。

蟻にも生きていくからには食糧確保の使命があるはず。そ

うだ！と思いつき、庭の隅に砂糖をてんこ盛りにして置いた。

あくる朝、あれほど行列をしていた蟻が一匹も居ない。庭を見ると、砂糖の上に真黒になるほど群がっている。やれやれ。

蟻さんよ、今のうちに働いて無事に冬を越えなさいよ！無駄な殺生をしなかったことで、気分的に清々しい。

灯籠に灯を灯して、夫を迎える。

ひよっとして太郎も帰ってくるのかしら。



永野 雅子

ながの・まさこ

株式会社 飛鳥
常務取締役

著書「わが家の太郎」

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援しています。

飛鳥かわら版 第215号【秋空号】 飛鳥出版室

●発行所：株式会社 飛鳥 ●発行人 永野 正将
●住所：〒780-0945 高知市本宮町65-6 ●電話：088-850-0588
●メール：info@asuka-net.jp ●ホームページ：https://www.asuka-net.jp